

第174回 森で遊ぶ会「富幕山観察会」

日時：令和2年10月12日（月） 8時00分～16時15分

場所：浜松市北区引佐町 富幕山

参加者：男性1人 女性27人 合計28人

担当幹事： 杉山、小久保

アシスト会員：青野、小嶋、佐野

台風は、太平洋沖へ去り、新型コロナで6回も中止となっていた「森で遊ぶ会」がようやく実施できました。感染予防のため21人の募集としましたが季節も良くなったこともあり32人の応募がありました。ありがたいことでした。久しぶりに外に出て可憐な植物たちに会いたいという皆さんの気持ちがよくわかるので、全員に参加してもらいたかったのですがそうもいかず、座席配置などを調整し28人参加していただくことにしました。

今回の観察会の目玉は、ミカワマツムシソウにナンバンギセル。特にナンバンギセルは山頂近くのススキ原にあるため、そこまで頑張れるか心配でした。そこで山頂まで歩くグループと中間点の展望台までのグループに分けることにしましたが、まずは3班に分け、中間点の展望台まで一緒に行くことにしました。展望台についたところで、足の状態や体調と相談し、そこで山頂まで頑張るかどうかが決めてもらうことにして歩き始めました。さてどんな観察会になったのか、各班の担当者に簡単にまとめてもらいました。

『観察会の様子』

（1班 小久保組）

第1班は、草花に詳しいベテラン参加者が多い班でした。例えば、シソ科の花を前にして「これはヤマハッカですね」という説明をすると、「あら、アキノタムラソウじゃないの？」「いや、葉柄に小さな翼があるから、やっぱりヤマハッカね」などという声が飛び交いました。説明する方も、うかうかしてはいられません。「このマツカゼソウは見た目が可愛らしいけど、千切ると嫌な臭いがするのよね」「ああ、そうなんですか...」そんな具合にベテランの方々にも助けて頂きながら、ガイドを続けました。暗い登山道の脇に咲くアケボノソウに、「これが見たかったの」と喜んでいただいたり、まだかなり咲き残っていたミカワマツムシソウを見ていただいたりしながら、中間点の展望台まで登りました。

ここで山頂まで登らず途中で折り返す班に加わるべきか、中には迷う参加者もいました。そこで「山頂まで頑張って登れば、ナンバンギセルが見られます」と、皆さんを誘いました。しかし「あら、ここにあるわよ」と、その場で目ざとくススキの根もとに隠れたナンバンギセルを見つけ出す人も現れ、このネタは使えなくなってしまいました。仕方なく「せっかくここまで来たのだから、皆もうひと頑張りしましょう」と水を向け、結局全員が山頂ま

で登ることになりました。途中で幾頭ものアサギマダラがヒラヒラと舞う姿に見とれたり、よく見ると意外に可愛いコウヤボウキの花をしげしげと見たりしながら、山頂まで皆無事に登り切ることができました。残念ながら頂上からの眺めは光の加減でやや霞んで見えましたが、頂上付近の草地に咲く花々や「お約束」のナンバンギセルにも出会えて、皆さん満足そうでした。

(小久保 記)

(2班 青野・杉山組)

山頂への到着時間を考え、ある程度的を絞って説明しようと思っておりましたが、参加者の皆さん、久々なのであれやこれや目がいて、結局あれこれ説明することになりました。

まずはヤマハゼの葉の感触を確かめ、ハゼノキとの違いを実感してもらいました。キンミズヒキとヒメキンミズヒキの違いを実物を前にして説明しました。参加者が小さなリングのようなナシ状果を見つけてくれたので、傍らのオオウラジロノキを発見できました。名前の由来でもある葉裏の白毛をルーペを使って落葉で確認してもらいました。皆さんルーペを持っているのに出して見る人少ないですね。ツクバネガシ、ウラジロガシの特徴や薬効、ネズミモチの材は高級家具になり業界では、タマツバキの別名を持つこと、静岡市ではあまり目にしないシラキが多く見られるので、シラキの名の由来についても説明しました。樹皮も白いが材も結構白いんだそうです。コウヤボウキとナガバノコウヤボウキ、触った葉の感触、花の付き方など比較してもらいました。満開のコウヤボウキの花は、なかなかきれいでその姿を写真に収めていました。キク科の植物では、シロヨメナとシラヤマギクの花びらの数や形状の違いを確認してもらいました。そんな話をしているうちにミカワマツムシソウが咲き誇る展望台へ到着、意外に皆さん体力の消耗がそれほどでもなく、結局、ここから折り返す方は1人だけで、自信なさげに話していた方も頂上を目指すことになりました。実はこの展望台のところでナンバンギセルが見つかり、お目当ての花は一応見ることができたのです。

山頂までの緩い登りの途中には、粟のご飯に見えるオミナエシ、それより力強いオトコエシ、ヒヨドリバナ、スズカアザミなど出現する種数も多くなりました。ツリガネニンジンやツルニンジンの花は既に落ちていました。山頂直下のナンバンギセルはさすが女性の気を引くことNo.1でした。ナンバンギセル(想い草)を詠った和歌を一つ詠もうかなと思いましたが、それどころではなかったのです。

(杉山 記)

(3班 小嶋・佐野組)

3班はメンバー11名で、小嶋、佐野が担当しました。

散策開始直後、センブリを見つけたので、どこにあるかを探してもらいました。花が咲いていればわかるのですが、なかなか難しいようなので、「この辺りにあります。」とヒントを与えて探してもらおうと、直ぐに見つけてくれました。登山口へ辿り着く前に、スズカアザミやヤマジノホトトギスがあったので、配付資料に記載されている特徴を確認してもらいま

た。登山口から入るとヒメシャラやオオウラジロノキがあったので、特徴を解説しました。

しばらく歩くとミッキーマウスの顔に似たウマノスズクサの葉を見つけました。葉だけだったので、持参したウマノスズクサの花の写真を見てもらいました。ラッパのような花の形や受粉の仕方も解説しました。匂いに誘われて花の中に入ったハエは受粉が終わるまで花の内側の壁に生えていた長い毛が邪魔をして外に出られないことを解説すると、「うまくできているねー。」と巧みな受粉の仕組みに驚いていました。ついでに、マムシグサについても解説しました。栄養の状態で性転換する植物で、雄花の時には仏炎ほうの下に隙間があり、匂いに誘われて内部に入ったハエは外に出ることはできますが、雌花には隙間がないため外に出られず、もがく間に受粉が起こることを解説しました。さらに進むとアケボノソウがありました。花弁の黒っぽい斑点の他に薄緑色の丸い斑の所に密腺があることやセンブリと同属であることを解説しました。

ヒノキの人工林に入ると「ジェイ」と鳴き声が聞こえました。カケスの鳴き声でした。カケスはカラス科で、ドングリを貯食すること、隠したドングリの場所を正確に覚えていることや鳴き声から英語で「ジェイ」ということなどを解説しました。ついでだったので、野鳥について夏鳥、冬鳥、漂鳥、留鳥の区別や時期によって、見られる鳥の種類が違うことを解説しました。また、この時期はタカが渡る頃なので、サシバを例にあげ、渡りについて解説しました。春に東南アジアから日本にわたってきたサシバは繁殖し、秋になると東南アジアへ渡っていくことや、渡るときには何百羽という群れが上昇気流に乗って上空に舞い上がる様子（タカ柱）を見ることができると、伊良湖岬、佐田岬を通過して渡っていくことなどを解説しました。初めて聞く話だったようで、「すごいねー。」と皆さん驚いていました。「運が良ければ渡っていく、サシバが見られるかもしれないので、時々、空を見上げてください。」と期待を持たせながら歩きましたが、残念ながら見ることはできませんでした。途中、オミナエシ、ミカワマツムシソウ、ナンバンギセル、シラヤマギク、リュウノウギクなどの草花を観察しながら散策を終えました。

(佐野 記)

とこんな具合です。伝わってきますね、参加者の興奮気味で明るい雰囲気。皆さん口々に「よかった！」と喋ってくれました。展望台から折り返した3人の方も、「小嶋さんのユーモアあふれる解説で楽しい時間が過ごせました。」と話しておられました。

今回は、下見の時より花数が増えていましたし、マツムシソウが残っていてくれたこと、アケボノソウが開花してくれてくれたこと、色鮮やかなゲンノショウコが見られたこと、それから慎ましい佇まいながら魅力あふれるナンバンギセルが今が盛りと咲いていたことなど、花に恵まれた観察会だったと思いました。

(杉山 報告)

『観察会写真で振り返る』



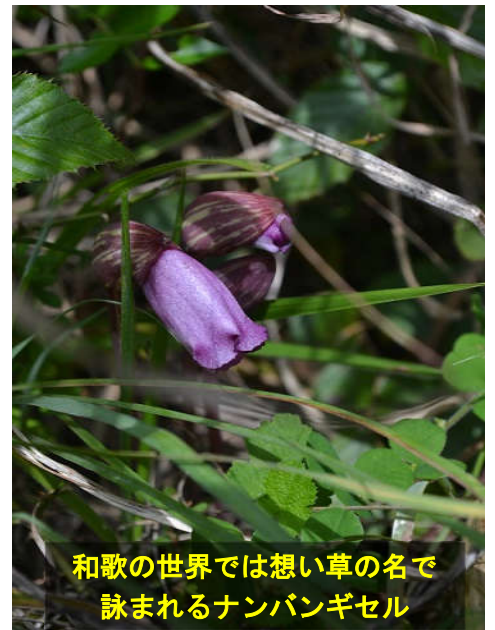
アケボノソウ咲いてた



鮮やかなゲンノショウコ



ミカワマツムシソウも健在



和歌の世界では想い草の名で
詠まれるナンバンギセル



さあ、もうひと頑張り



まー！可愛い ナンバンギセル